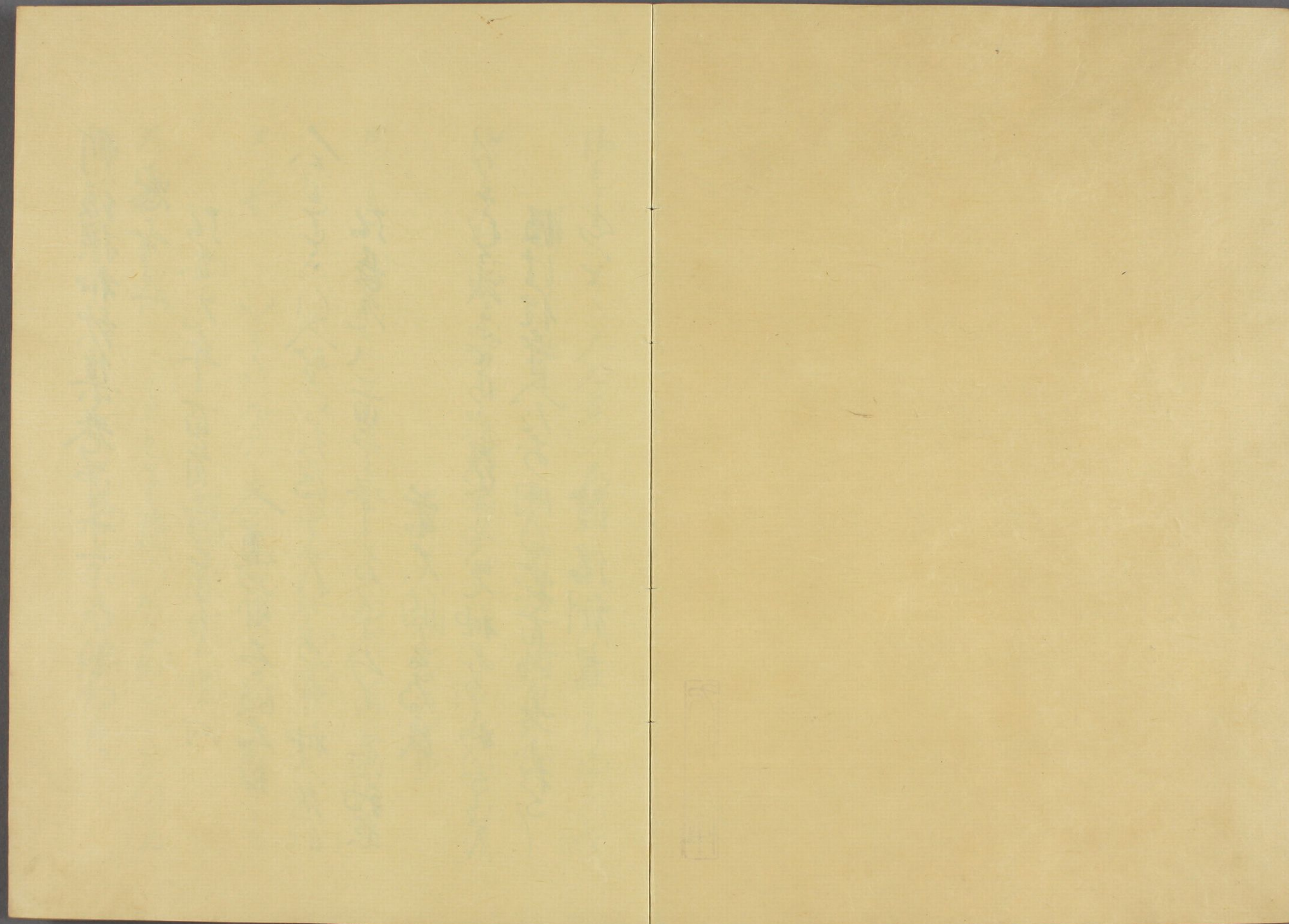




天
下
文
庫



新撰撰和歌集卷第十一

惠帝一

弘安元年百首より一時

入道前を改む

今道とてい入道の歌集とていふはあはれ神の歌は
弘安元年の百首より一時の時節

前大細を氏

よりそむ歌とていふは歌をて先神わがわが
後は性寺入るお白家百首より一時

とて

隆信朝臣

弘安元年の百首より一時の時節

とて

た道中將具氏

弘安元年の百首より一時の時節

前大細言為家

弘安元年の百首より一時の時節

正三位知家

弘安元年の百首より一時の時節

藤原重信

弘安元年の百首より一時の時節

友永為總朝臣

前中納言通房

下より常々ありしせうりりしを以て神とせし
後系極極及家之旨書す合小

人各有家

[illegible]

あの中を定家

去來今
此世
以舟
之
心
人
僧
正
心
念

子あつゝ
 是を神とす
 ういせ乃
 春秋の白
 露

愚意の人

玄御門院

我意いせれ松乃下草れゝれてのゝとるるを我
前関白を政大臣

志道ふそも無の松乃露ふそ海の神よみえとい
祝部成茂

下ふより其の露れも心も神の心もあつていへ
冥治百を可なりける時分を念ふ

常盤井入道前太政大臣

くらみえそく^ねや無^くのより衣^えのい^いえろ^ろ神^{かみ}の^の衣^え
 むらす
 後^ご漢^{かん}祇^ぎ陀^だの^の衣^え

趙子

八歳つ有家

あいつはあつたふにふつと昔れ下や友ふらん

あのみやうと

祝部 成良

いふとん袖のふとんの病も時をさよふ

今出河院近侍

さひねんもさうとさうと玉あもさうとさうと

密活百さうとさうとけつ時方橋恋

少将内侍

ひまのあつた橋の道さうとあつたさうと

尚侍有尔瑣子下家方合。忠恋

田大信

うらなははゆうとさうとさうとさうと

むしーらす

院卿家

みとやうとけつとさうとさうとさうと

西園寺入道前太政大臣

人さうとさうとさうとさうとさうと

はる川家

おのあつたさうとさうとさうとさうと

佐吉の社。さうとさうとさうとさうと

小
望大后女中更後成

秋の望み新のまきくに御座るふくもくはあふ

思ふ人の心とてあふせ給けり

天上天宮

この望みの心とてあふせ給けり
あふせ給けり

あふせ給けり
あふせ給けり

あふせ給けり

あふせ給けり
あふせ給けり

あふせ給けり

あふせ給けり
あふせ給けり

あふせ給けり
あふせ給けり

あふせ給けり

あふせ給けり
あふせ給けり

あふせ給けり

あふせ給けり
あふせ給けり

多田内子

我よりいふにぬれん人をもとすわが神の
内裏より言ふ方ありてしるし時思ふ

藤原為房卿下

そのつらに程といふ人せしめ神の御座
尚竹友原瑣子卿に家より合ふあはれ
と

津守國冬

さう海にわじりたる思ふにわが心なりと
むしらす

うしろあか

あつちの中へふくむはきふくむとせし

正治百三十八

前大納言澄房

人ともぬれぬる綿衣のしらぬを袖より
無治元十首より合ふ思ふ久恋

後醍醐院御教

つとむるもいふに思ふに思ふに思ふに思ふ
人をも有教

我よりいふにぬれん人をもとすわが神の

むしらす

素還法師 平江氏文

あつちの中へふくむはきふくむとせし

前関白太政大臣

系出はもとく世に人思ふに年々

よみ人へん

いそふらぬらぬ諸よとあはれや思ふ

右近大將道平

今思ふにふといふまれのうらやみ

後醍醐院御製

思ふにぬれぬやうにさあふつとあふ

後醍醐院御製

は橋殿昭

うらやみとあはれに思ふにさあふつとあふ

思ふにぬれぬやうにさあふつとあふ

思ふにぬれぬやうにさあふつとあふ

思ふにぬれぬやうにさあふつとあふ

尚侍有原瑠子朝臣

思ふにぬれぬやうにさあふつとあふ

思ふにぬれぬやうにさあふつとあふ

右近大將通忠

思ふにぬれぬやうにさあふつとあふ

思ふにぬれぬやうにさあふつとあふ

思ふにぬれぬやうにさあふつとあふ

紀跡望

うらゝ神の淑なりき佳しき人なす

右大臣

せいの淑神よあまのこ我のこころ

将子内親王

あまの淑神よあまのこ我のこころ

子五百番方合ふ 正秋門院丹后

きふの淑神よあまのこ我のこころ

あまの淑神よあまのこ我のこころ

りよの淑神よあまのこ我のこころ

祝部成茂

神の淑神よあまのこ我のこころ

平為時時村朝子

あまの淑神よあまのこ我のこころ

弘安元年百々方合ふ

人成茂

下の淑神よあまのこ我のこころ

堀河院時艶書乃方合ふ

りよの淑神よあまのこ我のこころ

なり

権中納言時

海を渡る玉とてしらぬふりてふとわが神

先後期に

村雲は風と新すれ月影をくもむと今を

建保四年内裏十その方合り

泰成雅雅

秋の田にうねのうへ露をけしてしとふとらひ

うねふとらひ

新後撰和歌集卷第十二

恋歌二

弘安元年百その方合り

法皇御歌

はるかにとて名を新れねとてねとて我を

弘安元年百その方合り

前大納言氏

うねりわが命は神のつとめとてあふとていふと

ねとていふと

うねりわが命は神のつとめとてあふとていふと

百首よりいれ一決は不意に

しるふに似たりとてなりしを命とけて相いり

むしらす

衣笠内大臣

あゝあゝ身ついでとて知らずとて人よ思はれ

中務卿宗茂親王

わらわのうらまへとて相いりしを命とけて相いり

前中納言俊定

あそふあそふとて相いりしを命とけて相いり

院大納言典侍

あそふあそふとて相いりしを命とけて相いり

右大臣平朝臣

海老原

あそふあそふとて相いりしを命とけて相いり

藤原為美朝臣

あそふあそふとて相いりしを命とけて相いり

あそふあそふとて相いりしを命とけて相いり

右大臣

あそふあそふとて相いりしを命とけて相いり

あそふあそふとて相いりしを命とけて相いり

今上御覧

あそふあそふとて相いりしを命とけて相いり

迄の方中に

靜仁法親王

不_レも_レ愛_レれ_レぬ_レら_レは_レ開_レて_レう_レら_レぬ_レひ_レま_レも_レ愛_レれ_レぬ_レ

前中納公為憲

道々々々の暮らさるゆゑに

大正十一年

項とみ我のひの面彩を以てても粧む程ぞ

仲夏感純
三橋和主

三陽神主

わうらふにのそくを契ぬ申意を

法下長壽

面影の如くしてみえりせんぞとぞ言ふ

建保六年丙寅三月

常盤井入道おと政右

うづねよりまをむくは面影とぞありては惜やん

鄭子
前大納言基良

いふせんまといふむねのきまをいふとていふふ

光緒廿九年八月廿五日

寄衣悲
恨之位乃能

此は我々の世の行くべき道に於ては愛を以て

五の五中
 大に廣茂忠感郭下孫

さひねの秋は多しとてさやかし福の憂も多

ふ正百さうなりけり時

室大后女中後成女

跡さつ休見の里者ふさひしにさ麻とてぬれを
光の尊寺入道お持政家慈千さう合よ
考慈意 前大納言資孝

若のころとていれ若慈わらねとふは跡にこれ
郎さうす お糸織雅有

とせさうとていれ慈衣涙さうとてひらぬ慈
しん人あか

うれ物とわらふはふてねさうはさう中女の月

あさう慈とていれ 院津繁

うれ力とつとあうを梓ういれさうはさう
慈さうれ中に 前大納言為氏

うれさうとていれふとあうはさうはさう
光の尊寺入道お持政家慈千さう合よ

つとさうとていれ月日さうとていれさうはさう
あさう細と澄房

おさうとていれ我とつとあうはさうはさう
平貞時郎

おさうとていれおさうとていれさうはさう

信矣邪

五

友人不知

五月廿

友尔为實胡片

弘安元年百三十五

歙山院內大兄

弘長元年 百々方なりける時不孝之至

常盤升合前出政書

夏之方なり 一 時日之

津守國冬

浦風乃逢て、秋の初をみよとあはれをとりひき
あはれ

野亭

近中將長

ふふやふふふと契て朽袖わくふふふ

新室内大臣

伊勢の所の漆のつゝをみりし浪の

はるけ院御覧

りやゝおまゐり縄おきてとていふもいふも

実話百さうもりけり時方夜意

少将内侍

そのつゝをみりし浪のつゝをみりし浪の

意のつれ中に 平長時

と海のおまゐりし浪のつゝをみりし浪の

りやゝおまゐりし浪のつゝをみりし浪の

後三位元宗

みゆの浦の浪のつゝをみりし浪の

子五首書方合よ小侍後

浪のつれ中に漆のつゝをみりし浪の

むし

藤原門院少将

よりみりし浪のつゝをみりし浪の

西園寺入道前大臣

よりみりし浪のつゝをみりし浪の

た大弁経継

よりみりし浪のつゝをみりし浪の

遊義門院

つとむるを頼みよとてまづ橋や山崎の河に神を
家よ百々うらふみ侍けり河の神を

光の尊も入るお務めを

音門の河神のふととられし神のなり
後系極務政家の音書より合り

後二位家澄

いふて新やむしやとて河神の神の契を

安のふれ中に 安かつ陸甲装

徒よりふのふとていふやとてあせとてあせのふ
せ

三條入道たふ^内臣

とい川をたふとていふとてあせとてあせ

意木田延行

思河のふとていふとてあせとてあせ

水影法師

浪川をたふとていふとてあせとてあせ

蒲河意 氏部で成範

年をたふとていふとてあせとてあせ

むらう なる孝宗御下

人志をたふとていふとてあせとてあせ

峰子内親王

よきものなりきりてふい川海の中れ終り終る
は眼の海よりせけり終り終り十二その乃
その中ふ 人終り終り博

我神の神はやうる終りの下系終り終り
光の終り終り入道お終り終り終り終りに

普光園入道前開白衣

あすの終り終り終り終り終り終り終り終り
あすの終り終り終り終り終り終り終り終り
あすの終り終り終り終り終り終り終り終り

あすの終り終り終り終り終り終り終り終り
あすの終り終り終り終り終り終り終り終り

あすの終り終り終り終り終り終り終り終り
あすの終り終り終り終り終り終り終り終り

今上御覧

あすの終り終り終り終り終り終り終り終り
あすの終り終り終り終り終り終り終り終り

前系終り終り

あすの終り終り終り終り終り終り終り終り
あすの終り終り終り終り終り終り終り終り

白河殿七百そふりよき云意

あ人納云ぬ家

伊約ひつる中れ家の雲りふとてふんあらん

建長五の丑そふりよ寄山意

そ宰権帥ぬ程

来とふりあふりふりふりふりふりふりふりふり

部一ふり

ふみ人不知

あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

建保六の丙寅年合り

あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あ中納云定家

あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

あ納云師相

あふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

五百番う合。後鳥羽院より

いさふもねうてくさふらぬをねむるに
祈念と

前大納言実教

う人の心もす我より余の心もすね
内裏百さうなり。時おあ。心と

お大納言実世

いさふらとやめし祈念もさうきいほのね
念の方の中に 小侍

佐吉の祈。いりあまもくく。女はけり
高階宗成朝臣

いさふらとやめし祈念もさうきいほのね
遊義門院大納言

いさふらとやめし祈念もさうきいほのね
典侍親子朝臣

いさふらとやめし祈念もさうきいほのね
弘長元年百さうなり。時不念念

前大納言実世

いさふらとやめし祈念もさうきいほのね
いさふらとやめし祈念もさうきいほのね

いさふらとやめし祈念もさうきいほのね
いさふらとやめし祈念もさうきいほのね

有尔基澄 有尔基子

有るむはよきせのわくを頼むる命をまじ
は平雲雅

はくしてわくをいふとくを契ぬあめぬれ
西園法師

いふせん我のふとふとふとふとふとふと
入道おとけの信

うらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
弘安元年百首をもちりし時

有尔為歌

我より命ふとく頼むるまゝあつさふたのま

恋ふれ中に 前内大臣 実

いゝもゝあつたえあゝまゝのいゝ世とけて思ふ

大に頼重

めくろゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

源親長朝臣

はくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

お五百番をうけ 醍醐入道前大臣の信

池水ははくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

むらさ

お中納言實実

形水は救く人を我く救ふを志す神やなま

有原躬仲朝臣

物思ひのこもけりす枕もえぬ涙もあらそ

光の影も入道前拾政家志すそ方奈

多かり志

源家長朝臣

しるあはれあはれいひん持ちあひいふく

志のちれ中に 前大僧正聖武

物思ひのこもけりす人志すそ方奈

前大僧正聖武

玉ふくしるあはれあはれいひん持ちあひいふく

弘安元年百三十九年

入道二品親王性助

しるあはれあはれいひん持ちあひいふく

有原為佐朝臣

逢ふてはれ月日のそはれいひん持ちあひいふく

むしらす

前大僧正聖武

しるあはれあはれいひん持ちあひいふく

権中納言実國

その世は我ふるやけりしるあはれあはれいひん持ちあひいふく

しるあはれあはれいひん持ちあひいふく

新撰和歌集卷之十二

卷三

後京極坊改家音番方合

後二位

以ても人の心を忘るゝ事あるは其の心より思ひありた
 思ひ恋とてふとてふ事とせしむ

今上御製

由と云ふも、もろ程のめいひをもとめて、契りか
山階入道たふは、お十と云ふは、安心念

蘇大納云為家

佛の如くは
中務の宗尊親王家百のたり

鸞司院師

あめをく人の契りそありそぬ
今由ふもとくう他
恋のくや
院御製

院柳齋

逢ふまゝぬたのまゝいゝて契りつゝりは身や
後京極坊政家立音書より合よ

前中細玄定家

わらふは
唯もつあさ今りてたのめかおれ書とよ

むす

後一位襟子

送一位襍子

今頃の佛よふいふのつゝ毎とくうものそれ
内裏百々をもちり一時切念

遊義門院檀人綱玄

契りていふ世ふいふうらふき法にきてまふ命を
契念と
は下定因

うふふいふのふもけい佛のあふ世ふのふふけい
有尔光盛

佛とほのまてもふいふせんひてきくくゆふけい
素還法師

佛とふいふと契りてふいふやうの下れうらふと

中務で宗吾親王家百々をけい

前泰義能徳

ふのつゝ佛ふふ契りてと我ふふたのまらふん
むーらふ
平宗宣

あふひと命にふてふいふの佛ふとふはふり
高階成朝

ふのふふふふふふわ佛の程やふふと華
前中納言資高

佛のふふふふふふのふふふふふふは契りてふふ
あ中納言俊光

何と云ふにぬふとて又かきとるれどもとて
笑底経久

昔にいふとてとるもとてとてとるもとて
百首より一時の意

は下定為

いふにいふとてとるもとてとてとるも
意のちれ中に よみ人か

又もとるもとるもとるもとるもとるも

津守四助

いふにいふとてとるもとてとてとるも

前系後実時

いふにいふとてとるもとてとてとるも
は眼意分

初後てとる月の新のやとる月の神源とて

平宗泰

いふにいふとてとるもとてとてとるも

友系親方

いふにいふとてとるもとてとてとるも

百首より一時の意

昭慶門院一系

おのゝとてふにいふらんこの月とてほとこひや
都——らす 九条たふ臣女

あめそとふけきこひふゆとて出る月れ
月前待とていふと

今上御覧

仍よあけけのこられいゆの月れ新がけ
あ——んと 典侍親子朝臣

なめいこいといふあめとてあけけの月
五百番ふ合よ 参儀雅雅

のふ入とて月とていふとてやんちのめを

実月とて

後醍醐院御覧

ゆりのけいといふ人つとてあけけの月
百とてふなり——時とて

友原為藤御下

あめとてふたのめあけけといふいしあけけ
弘長この内裏百とてふなりけつ時寄戸

恋

前大納言資季

とらとてあけけは枝のとてあけけといふ
あけけとて

参儀雅雅

ゆゆとてあけけといふいしあけけといふ

久安百々々々々

待賢門陳垓河

新より来る月夜を
 知る人の子を
 前大僧正道瑜

鄭子

蘇大僧正道瑜

たのめと我よりゆきて人ゆかやといふとき

平時常

あまのこふとくもわふとくまふふとく

右道中將冬基

琴石
よろろとふくむ
ほろろとす
はてとさ
あふ

天遊中興氏

うゑと~~き~~ふふの歌とてふと傳のあそびは

法不圓解

うめ^みよふのふもて色情ふうは藝をさげめ

百々方なり一時得意

桉案使矣春

なりけり我は
小待たれて
あはれね
れど

實洛百々々々々々々々々々

坡曉峨嵋水

ふくみふくみ雲のふくみふくみ海はふくみ

丑之方合以來不聞惡

權大納言師重

ゆるそとやそがのうきそとふはけきき契り哉
月前を恋ふふと

前大納言経任

独り床より見て月影よりふとふとふと
恋ふれ中に 中務卿宗尊親王
はしり時うやめをそはけはけはけは

あふ僧正深恵

贈ふとあふとふとふとふとふとふと
あふとふとふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふとふとふと

あふとふと

前大僧正聖恵

か

むーら

後二位家澄

君と又君とふとふとふとふとふとふと
前大僧正慈法

ふとふとふとふとふとふとふとふと
中后祐賢

ふとふとふとふとふとふとふとふと
前大納言為家日吉社より方合(ゆき)

寄枕思恋

光俊朝臣

あふとふとふとふとふとふとふとふと
あふとふとふとふとふとふとふとふと
あふとふとふとふとふとふとふとふと

いそぐまの福とてふは新よやそふ妙の行ふか
也そふ合よ来不面恋

尚侍有永瑣子御下

ふいそふのこわりそは瑣子有珍い思もふそ
別恋と 権中細云四信

ふわうそねふいふそりいま一時とふつ
ふそ人不知

わらふふふふふふふふふふふふふふふふ
久江頼重

噫のかもふふふふふふふふふふふふふふ
は眼源義

甘あそけはのゆふふふふふふふふふふふ
平感房

わふふふふふふふふふふふふふふふふ
子五百番方合ふ久細云通具

噫のふふふふふふふふふふふふふふふふ
後系極振政家百番方合ふ

寐まは所

逢ふそふふふふふふふふふふふふふふ
源親長御下

わらふも又左のやけくは是くもり別あす

人の後重

ゆふれがくも神の月をしもゆすめを我

洞院拾玖家百くもくは朝意

康壁門院少将

左の月い形身またのまはと書事ゆてれ身ふと云

形ふ知

前大納言良教

なくて又あふともとくぬ身いれやくは左の月

お大納言良教

形身とて我くもくは朝意くもくは左の月

前大納言良教

くもくは朝意くもくは左の月

後惠法師

我くもくは朝意くもくは左の月

式乳門院卿連

かきぬ神の別れあめふ涙あきくみら芝の露

祝部成良

りすふなるのしるふくはくは朝意くもくは左の月

平久時

くもくは朝意くもくは左の月

ね中

弘治三丁酉内裏百々をりける時方水
意 近衛閑白た大臣

名をてしつあさねのふすきとあねのふす
意のふれ中に 尚侍有原頼子下

一とらふたのむれりともふらふつきとたをれ
文永七年九月お内裏之首うし、契意

前大納言有原氏

代をてはこりとも契つともいふやうのと意のふ
郡一とす 後二位階散

ありともたのこつとせぬ海川ともいふをふりてを

有原泰基

あつとをわたりともいふと系たつと契つとも
後二位光成

惟方ふらとて下細の掃ふあつともむすや
遠意のふと 内大臣

とやあつともいふともいふともいふとも
有原為信下

あつともいふとも契つともいふともいふとも
意のふれ中に 後二位氏久

とらふたのむれりともいふともいふともいふとも

後系極振収家立音雷奇合り

前中細云定家

面影なりし宿ふらんあらずてこゝね風の松よ吹ふ

むふ知

源有長卿下

いづこいさえゆるともせやれていさあなる芝の

権大細云所信

徒よゆらん人もたるとをりといてはこゝろみなり

類長一平

前系後花良家分合は隔河恋

有原親威

いづこいさえゆるともせやれていさあなる芝の

むふ知

権中細云雅平

任君乃存おの浪をてあふとるを弟いなりとては

順徳院御製

浪をてあふとるを弟いなりとては

その

徳倉右大臣

我せと松浦の心の音うゝ玉のふあはれは

有原雅昭

里あふりそあはれ契よりやそみるあはれは

吹風催恋といふと

平時村新良

はるす風よきてもぬくのほろこそまらう煙火
うめて物やけりぬのほろこそまらう煙火
りてふやをれもつらうき

大宰権帥為經

初来とひて契りしうきぬあそきあそき

返

よみ人しらす

刀さきなりすうきぬあそきあそき

あてあけん

新撰撰和歌集卷第十

恋歌

弘長元年百首うきなりけり時遇不逢恋

衣笠内大臣

いふせん若かりしうきなりけり時遇不逢恋

弘安元年百首うきなりけり時遇不逢恋

院大納言典侍

くやうそねひそめきりしうきなりけり時遇不逢恋

前大納言為家百首うきなりけり時遇不逢恋

信実卿

拂ふ人ともやうして契りなほさるゑとも相じふ
むしらす 僧正実珍

ちりあやふ拂ふ契りなほさるゑともやう
よみ人ふか 云龍法師

あふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
後二位忠意

あふふふふふふふふふふふふふふふふふ
寛治元年十首ふ合ふ遇不意
花山院入道右大臣

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふ 前太政大臣
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
百ふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
権大納言云
白河殿七百首ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
後醍醐天皇御
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
むしらす 権中納言云雄也 冬島

ふじといふはつる契とて秋の月と云ふ
今出河院出来

わづらひ我涙とてさう月と形見と契とを思ふ
并大納言甚良

はて又つる秋の月影とて面影と云ふは
子五百番方合よお中納言定家

思ふもあやの曉もわづらひの月と云ふ
赤陽門院越前

いふ女とてさむやとて秋の月影とて
寛治元年の月と云ふは月影と

そ奉権帥為經

思ふも月とてさむやとて秋の月影とて
慈光寺中記 源親長朝臣

つるもさう面影の秋とてさむやとて秋の月
越義の院とて

ふるもさう面影の秋とてさむやとて秋の月
は眼の秋

ふるもさう面影の秋とてさむやとて秋の月
源家清女

ふるもさう面影の秋とてさむやとて秋の月

後三位有宗宣子

ふとてうらりけりてのちうき世のつとけ
個院持政家百首うよ遇不きを

前八個云ふ家

ふねのきそひひのよとてそのまにたのまにえ
部一うす

津守四助

ふふあてとてうらりけりてのちうき世のつとけ
丹波経長卿下

新あはれきふのきそひひのよとてそのまにたのまにえ
法下聖勝

ふとてうらりけりてのちうき世のつとけ
権人僧部孫え

ふとてうらりけりてのちうき世のつとけ
後京持政家百首うよ遇不きを

後二位家澄

ふとてうらりけりてのちうき世のつとけ
ふとてうらりけりてのちうき世のつとけ

中原師宗

ふとてうらりけりてのちうき世のつとけ
ふとてうらりけりてのちうき世のつとけ

後一位祿子

そのまゝいふと通ぬらうとてはてもなうとていふられ
百とふれられ 次は遇不意とて

太上天皇

朽木とて海神とて又とてみよとて契りて神
弘長元年百首奇なりけり時逢不意
後二位新家

さへわをいふらりて又海神とてなりとん
唯宗忠宗

浪の神の藩りてとて枕うきとてと独りなりとて

高階宗成朝臣

つとむといふはうらけとて又とて重ぬ神とて浪
観念法師

わとていふはうらけとて又とて重ぬ神とて浪
内裏五首とて合ふとて怨恨とて

照割門院大納言

ゆとていふはうらけとて又とて重ぬ神とて浪
無方れ中に 前泰後長成女

いふとていふはうらけとて又とて重ぬ神とて浪
權少僧部澄舜

子不為父母憂
 父母憂之
 子不為父母憂

源益康軒

多えわうお飯のきくくきくきくきくきく
野ーらす
大正改國女

李江政國女

江都乃中原之衝也人必爭之
百有五年之久而時遇不逢悲

前人儆心良覺

香長は此の海色なりかみなりなるん

意乃中

後三位者原宣子

そてやふらふきふをいふてそふ

法眼源義

若橋乃娶、事此
首之、為之
と云々

友原基任

御てもひるふるを我々のまじりて

前人僧正書卷云

今とてふいふそとわきまをわくも神道なり

源親教下

心そふあつとくをいふふえぬ契は

絕後意

前人酒玄英歌

あまのこころにこそあらはれしをこそ思ひて
むかしこそ思ひて

あまのこころにこそあらはれしをこそ思ひて
むかしこそ思ひて

あまのこころにこそあらはれしをこそ思ひて
むかしこそ思ひて

あまのこころにこそあらはれしをこそ思ひて
むかしこそ思ひて

あまのこころにこそあらはれしをこそ思ひて
むかしこそ思ひて

恋ふれ中に 平時

あまのこころにこそあらはれしをこそ思ひて
むかしこそ思ひて

あまのこころにこそあらはれしをこそ思ひて
むかしこそ思ひて

あまのこころにこそあらはれしをこそ思ひて
むかしこそ思ひて

あまのこころにこそあらはれしをこそ思ひて
むかしこそ思ひて

あまのこころにこそあらはれしをこそ思ひて
むかしこそ思ひて

うれしく様うたのめいふふれくそはしんまな
おあまはいじとじいふの心よめ余りなり

平河氏

えあめ牙い際世なりてうとみるもれ余り
中務の宗を親王家百とまり

典侍親子綱臣

いふ人今てわがをうにありと人よと
むらす 衣笠内大臣

けつてまゝ命のしあふとてうらなれぬ

式子内親王

あつてそめいふあひくまりいひ

契つていふとてなりあ

新後撰和歌集卷第十五

恋奇五

建仁元年二月方合よ遇不逢恋

望た后より又後成

泊瀬川又んとうたのめうきをけじ二りのま

あひしを

新治親王

人かやひの契りもろく世よじうけあふれ

権大納言乙殿

心を昔ふも何すうもも契りしうきふも

百さうなりし時恋

前内大臣 実

うきをさきよじしとねあきき昔れまのうきひ

むしらす

よき人ふか

と道しとひりりれあやけきう中れ情なるん

百さうなりし時恋

遊義門院権大納言

よのひそくもしうきやきうきふれあひ

絶恋の心と

今上御覧

ゆめよふあふもけしけふあふも契りしと

建保三年丙寅奇合り

いふことあるは多かりけり
又永二年九月十三夜五時方余絶意

近湯開白たた

夜く嘸りたる物といひ
むら

権中納言

はしり嘸りの別ふ身はなかりのしりありき
百そ方とてふり
時遇不意

権大納言

はてもそのありつり
恋ふれ中に
有原宗秀

面影のありふる中あり我や人といふ果は

前中納言

ふはふいありふるやとて思ひに
有原為徳朝臣

はくしに思ふてもいふとてふるの契り
百そ方なり
時意

藤原長経

みともいし出
むら

有原為教朝臣

ふはふいありふるやとて思ひに

也

氏部之質宣女師有之聖

めりわきれいまゝもたれもゝうはるゝとみえり
遇不孝を忘るゝとゝもせ給けり

土御門院中殿

つゝまのむねやうゝ人ゆゑとよ神のゑり
実り愛をて 前僧正公朝

月常はれしりなるとよゝうゝ人そゑふを
建保二年内大臣家百々うゝよりあゑ

お中納言定家

形見よりわゝるゝおが聖の萩の露よりふゑいふ
いふ

むし

お念法師

ふりひのゑれねとよいふゝ愛の萩原
後京極後家百々うゝ

後二位家澄

秋風よりひく萩れなるとゝゝうゝ人のゑり
子五百番うゝ令よ皇女后女ふゝ後成女
ふゝうゝの妹れ何とわゝるゝむ言れ萩の上
里ふゆゝうゝ萩れとあゝせゝりゝうゝ
宰相曲侍後成の女尚侍子
宣家之同妻
中ふゝいゝとよ月れ萩れとあゝのゑり

わがまゝとていふは此の意といふなりわが中れ契りそ

二條院彌波

今さらしめふ余とていふとてあまも人の心をた

百とてふなり一何遇不逢意

前関白を政大臣

さひねの心あらとていふとていひ一何まにん

あはれ

新撰撰和歌集卷第十六

恋奇六

絶望年恋といふと

中務卿宗并親王

いふはのこゝそおのの言の言れたるなり

家れ音書の方合一後京極坊政前を政大臣

やまといふは人の通ぬとていふは世原といふは

前中納言定家

いふは我があやれ思ふといふはていふは

むしらす

よみ人不知

祐長人ひくればさきと神よあふ露れ

院御歌

はらけの秋を昔とて我身よあふさけ風
弘安元年百さうふなりし時

権中納言云雄

あふ聖のまき高き舞風のぬりうみさき

意方れ中に 帝題法師

昔乃ふあ聖のほれ忘水何と文よさひ野人
後二位のあ住者社とて方合のりて恨

絶意

津守國平

我あふはくはうのさやひさうし末ををり

後京極坊政家と音番可合り

後二位家澄

あふあふひさうさ伊をわもも人を恨め神をわ

百さうふとせ給けり時恨意

法皇御歌

とくあ恨はさうさ聖のうと名やとまふあ忍ひ
寛治百さうふとてつりけり時客衣意

光後朝臣

あふあふさあさあ中ふてはさうのうみ

人の頼重

とてふ人ほさるはさしき人の心
入道二親王性助

えと程思ふ我れつゝささく人の心さしき人
百ささくされ一は人他恨意

今上御覧

人他よとてふささく我れつゝささく人の心
恨意の心

ささくもささく我れつゝささく人の心
百ささくされ一は人他恨意

たふ

ささくもささく我れつゝささく人の心
ささくもささく我れつゝささく人の心

ささくもささく我れつゝささく人の心
院よ二十ささくされ一は人他恨意

前大僧正実業

人よとてふささく我れつゝささく人の心
百ささくされ一は人他恨意

あ大僧正実業

ささくもささく我れつゝささく人の心
あ大僧正実業

前中納言左馬廐

命あふけいといぬえぬ身ありせいのせうくはねし

急ぎし中に 院御歌

逢ふはつ命のまゝい人のけいさき又いなき

右大臣家續波

うらふんつらもけりて命をうけあせし

平宣時期臣

いのちけいさきいぬてあふ人限を世命あは

うらふんつらもけりて命をうけあせし

いのちけいさきいぬてあふ人限を世命あは

権中納言左馬廐

いのちけいさきいぬてあふ人限を世命あは

右大臣家續波

うらふんつらもけりて命をうけあせし

平宣時期臣

いのちけいさきいぬてあふ人限を世命あは

急ぎし中に 院御歌

右大臣家續波

うらふんつらもけりて命をうけあせし

急ぎし中に 院御歌

前岡白々政大后

新来と繋りしうそ恨しうへともくひてとせ

石大后

うみても程あやせふありふるはさきも余れん

むしらす

近來雲白たふに

うねあつたはわねの年月つてさきとく

あつたはわね

新後撰わ歌集本を牙十七

雜奇上

子五百番う合り

前中細云定家

来とせのほにわんいふは痛の捨るは家の通

後二位家澄

いれどもとせぬのい白雲たうりあつて布は

野中とせぬとて 兼直法師

汲人といふふありねとも野中とせぬといふ

弘安元年の百さうなり一時

土御門入道内大臣

あり代より後の病をいふとわきのたけさう

任の印をある 如影法師

任者松吹風もろくね岸の浪やむしめん

都らす 権中細云云雄

いふてあふさうさうらん風をいふあまの舟

前内大臣 矣

ふとおとて我もむしめしゆあり若殿の仲あふの樂

海をいふと云と 今上御製

海をいふと云と云とやれあふらんわいのうらあ

新

都らす よし人不知

風吹の波をす破の岩ね松の志が深さみよりあふん

白河殿七首そふより子目松

後醍醐院御製

子目松と云ふひささむし小松原本たさゆてとみは

まれ方乃中に 前大僧正良寛

陰茂さそのふれ亦るもいそ路やむ雪そのね

雪のふけくらとくゆけり雪といひ月乃あ

ころよ万里山脈右大臣やてゆけりふ

月花門院

清沙の雪のつきてや我宿と花のりさふ人のふらん
梅乃新は花をて友原為道都下より
けり
院大綱と典侍

ふもふもふもふもふもふも梅乃花のふもふも
返一
友原為道都下

ふもふもふもふもふもふも梅乃花のふもふも
返一
平時高

ふもふもふもふもふもふも梅乃花のふもふも
返一
性助は親王家五十五より

前系後雅有

梅乃花のつきてや我宿と花のりさふ人のふらん

平義政

梅乃花のつきてや我宿と花のりさふ人のふらん

前大僧正祐助

梅乃花のつきてや我宿と花のりさふ人のふらん

津守四助

梅乃花のつきてや我宿と花のりさふ人のふらん

前大僧正祐助

梅乃花のつきてや我宿と花のりさふ人のふらん

梅乃花のつきてや我宿と花のりさふ人のふらん

入道前太政大臣

世と持つ身は隠家なる所よりそとて思ふ所のまゝ
むしらす 正三位雅朝

我つらまゐるつゝ一山撫むともきこといひのす
平時止

雲とくさふふいふとて撫むとき梢や移すも
中務卿家系親王家方合ふ閑居花

前泰義能清

ありとも人よとて思ふ宿のこもさねをこね
三十首方めさけ一決は思ふ花

院卿家

毎と身とつらに秘して我せふりけ花の下陰
あけけりおくのりこ花とつるすも

二品法親王尊助

とひやとありてあふむ花ふもさけけさるのつ
花乃ち中に 友原乃繼朝下

藤原宗春

なりあつて我身とふりねの撫ふそらけのまゝ
正治百とさふ 源師光

年々花はもとも人々我身ひるもきふり

都くらす 権律師玄貫

徒よりあはれさむのへは我ああす人々我

山望いよみゆきうは花らりてはははう

てくさうーやてゆけんのむら

平親世

あそほあふさん望花みよそそ人々

花乃はりふふ守ふまらてうあ

道徳法師

けしとそむく世果^かもそむく我身^そを

そひら

むふ知 源光行

命とむむらあはは花よの世とひをす

津守四平

橋花すうやそそ吾れ山やうあふあは

前大僧正澄

あま我ら花は唐とて山のひあはれうあ

院みれあふそそ時山お僧よううそ

りあゝ位よつせはうて天台座をひり

て内裏あゝまのは七佛業師ははとひ

ゆふ時ひつそあ お大僧正源惠

山をいづるもたえまみえぬ花より井の色を

前代若水齋花友

咲花のうつゝあふとふみそめ程よまをそそ

澄寛法親王

ふきも又らもとらとそわたりぬ花程は

弁内侍

なりていさふほのまゝに契ぬされよとら

祝部 國長

人とな宿の橋をいふて風よつゝとほめ

僧正 龍惠

されあともふ程ぬ人いそとふつゝとほ風を吹

平時村 柳下

ぬらふ雲のりやせふ常あゝや花のらるゝん

平貞時 朝臣

水より花の本陰とふとをん橋よりと雲は海

中江祐 玄

ちりやと花のふととふと風もゆいふとふと

は平 雲雅

あふとふとも梢よりさる風りや花とふとらん

中務 宗并 親王家 家方 合り

源時清 作本隠岐入道

源時清とていひしき月を照らすなりとの言ふ

去る方の中に 前開白太政大臣

わたりあふまゝにそられたる代よりいふてすむ

春の月能く和てさひつをゆけり

は平能海 関東

すじあふにけしき月を照らすなりとの言ふ

山階入たるは家十よりう田家あり

源兼氏

苗代のまじりていふたわうふ言ふやゆせん

むしらす 平宣時朝臣

うれとふとけしき月を照らすなりとの言ふ

前開白太政大臣

えれやまの月を照らすなりとの言ふ

あ大僧正の言

ま月を照らすなりとの言ふ

りるふれとて契てゆけり

いひたるのいひに二月つゝあるは

きり

中原師尚躬氏

むしと契しとて言ふはあやうき言ふは

三月ふく海ふ月をけるふふ

友原京房朝臣

おみけの海生れ八重様ふさけりまの歌をうき
あふふさけりまの歌をうき

天台座主道玄

あふふさけりまの歌をうき
述懐ふふ 笑哉雅久

秋ふふふふふふふふふふふふふふふふ
祖父忠久持水遠使ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

惟宗忠宗

あふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふ 乙卯貞重

あふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふ あふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ
権大僧都あふふ

平時遠

あふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふ

笑花遠久

年々我神心乃何事由は神事と申す事なれ
そとれ以て一物事は神心とて

西行法師

何事ふとておはしと申す事なれ
平時藤

何事ふとておはしと申す事なれ
光俊親王

何事ふとておはしと申す事なれ
雅成親王

何事ふとておはしと申す事なれ
高藤と
中務と宗尊親王

何事ふとておはしと申す事なれ
前中納言俊定より代つるけし
中原師宗

何事ふとておはしと申す事なれ
前中納言俊定

何事ふとておはしと申す事なれ
観念法師

何事ふとておはしと申す事なれ
あまらるる川津とてす

大に成重

くはくしるふふ雲の辺方とみえすぬわつ五月の
源季成

風とら雲の末葉とく落るあまのほろと花
雲とけみく姉うらつすそと

平親清女妹

あさ月よりわづらひいふ秋葉に雲いそぐ
返一 平親清女

我よりとこひの消えうらふ雲よりとくあ
蝉とくゆく 前糸織忠定

津守國助

いそ光やうら白露は月約つうたうのふれ
むーらす 有原親宗

宣人は師

うきおれはきこもありやとせつめれはなえ
式乳門院河運

ふくまぬ昔れとこひねのあふれせうの松風
実風述懐とくくそと

雅成親王

秋の月をさきもくありきし聖王も山も峰風を

秋より中に 前僧正通海

然いそ露を帯しもわしのきさうふとや物替

弘長元年百々方なりける時露

あふ納云ぬあ

よあくれ海あひ音衣林と露なりけり

都らす 前僧正公朝

我神のあひとみとほふあつて露きさ森の

お右あつて露きさ森

下条

今世は作ら我きものことあつて露きさ森の

惟宗忠宗

人そふりものことあつて露きさ森の

権中納言公確

いふと老の涙はゆふとえの露と露きさ森

前大僧正実宗

年をくくくぬる涙はゆふとえの露と露きさ森

友永秀長

雲のふとくくぬる涙はゆふとえの露と露きさ森

弘安元年百々方なりける時

入道二小親王性助

あつちのふのいかに歌よて山平のちふれ川芳
秋のふれ中に は平定志

恒ち月首の秋風よあつちのふのちふれ川芳
は九条内大臣

我あつちのふのちふれ川芳よあつちのふのちふれ川芳
入道前黒白大臣

いふちのふのちふれ川芳よあつちのふのちふれ川芳
遊義門院

はつちのふのちふれ川芳よあつちのふのちふれ川芳
はつちのふのちふれ川芳

光俊親王

あつちのふのちふれ川芳よあつちのふのちふれ川芳
源季彦

あつちのふのちふれ川芳よあつちのふのちふれ川芳
津守國平

あつちのふのちふれ川芳よあつちのふのちふれ川芳
は平定志

あつちのふのちふれ川芳よあつちのふのちふれ川芳
常盤井入道前大臣

あつちのふのちふれ川芳よあつちのふのちふれ川芳
あつちのふのちふれ川芳

月の来むと思ふてうらふさふいなり
ふつらうけり 弁内侍

ききとよひや出づ雲ぬそ友はましの秋月影
文永五年九月十二夜白河殿五ツ言合よ
河水沈月 後醍醐院御歌

我のや影もらん飛鳥川ふら影もあは月影あ
むしらす よし人ふか

ふとみんとうねを升れ浦あめうてはま秋月
入道二小親王性助

今そ月んとそ住居あふふ秋月あは月影

群 仁は親王

つとあつとめうらなをわ令むむそられ秋の玉の月
順徳院御歌

秋の月れふしそくぬきに持葉の松をそす
秋

秋人ふか 典侍光子二平より

秋人ふかをそせよ若ふき木の鹿乃秋れいふ
伝美御下

さうらり風をそふそひおしとよみの秋月
里橋衣と 平頼春

秋やうぬりまの秋人若叶のさや秋月あ

野の方中に

入道二水親王性助

我處の所にしむるに任せて病も何處よりおきて

文永五年九月十三日白河殿より方合

言山お葉

後醍醐院御衣

ふりて神も何處よりおきておきておきて

野不知

権中細云云雄

我と我と老の涙我神はわたりておきて

前権僧正教範

年々てゆりおきておきておきておきて

大に宗義

ふりておきておきておきておきて

神云月乃は方合のまけりておきて

おきておきておきておきて

はてしなくけり 藤原乃道下

おきておきておきておきて

おきておきて 宗惠法師

吹あつたおきておきておきて

有原親範

おきておきておきておきて

前大僧正忠源

予すわあやうに月と心とをゆきて世とを隔りて
百をふたりなり

あふ細云乃也

和方これや五代をひいて漢を考へていふは、
二千年を考へられし漢は、浦千島

院卿

我世よりあつたはるし海子よりあつたはるし
入道前々改大后

酒をふりふくはるゝのさかふと光るゝにねそぢうあられ
通

蘇僧正朝

表ふも老乃れ光れ
友子為我よ
毫わく月ふあかり
いさゝか
廟上ゆりし
建さるき
う時
吾れ
陰々
日清涼
原ふ
所を
せ
ゆけ
後
二
位
新
政

いふ事の上よりいふに
返し

くらふとてなつりふくはる雲の如きなり
 前中納言とてはふりけるなり
 為家とてふとてはふりけるなり
 うけり
 権中納言とて雄

五三九
年
と
な
り
し
も
世
ふ
り
て
味
も
な
き
宿
の
白
雲

也

前大納言為家

消滅の詔をふりて程はなれぬとて

野中為家

梅家使主泰

とある詔はゆきて目撃の程はなれぬとて

山家為家とて 北條法師

とある詔はゆきて目撃の程はなれぬとて

野中為家

先後朝臣

とある詔はゆきて目撃の程はなれぬとて

は眼廢融

詔の事ふりて我身せよとてその年

有原佐朝臣

冬に嵐ふりてすゆの雫ふりて

中務卿宗孝親王家百々可

小巻

わきとてあめふりてふりてはなれぬとて

弘安元年百々可なり

土河門入道内大臣

弘安元年とてその年とてあめふりて

百々可なり

藤原為相朝臣

我身世より此をよめ年よりいふことなきこと
都くす　よみ人ふか
程よりいふことなきこといふこといふこと
これいれ

新撰和歌集卷第十八

雑方中

うゝれ家よりうゝれりうゝれり月より
よみ人ふか　権中納言俊忠

詠つるのやうにうゝれり月のさへいふことあり月け
月の方中に　基俊

よきすゝいりうゝれりうゝれりうゝれりうゝれり
弘安元年百々方中より一時

二品親王寛助

うゝれりうゝれりうゝれりうゝれりうゝれり月より

むしらす

入道二品親王性勝

ふむとらてもわづきあの神嘯をさるゑのさきと
正安元年九月の乙亥蓋殿とて山北法師
一何とて自ら懺悔ふといふつら目ふりて
名跡なりといふ一たけすきくんのせりふ

は下愚基

ふむとらてもわづきあの神嘯をさるゑのさきと
むしらす 式乳門院水運

ふむとらてもわづきあの神嘯をさるゑのさきと
百とらてもわづきあの神嘯をさるゑのさきと

は里河製

ふむとらてもわづきあの神嘯をさるゑのさきと
田庭松とてふとてふとてふとてふとてふと

ふ上天下

ふむとらてもわづきあの神嘯をさるゑのさきと
飛山殿とてふとてふとてふとてふとてふと

遊義つ伝

ふむとらてもわづきあの神嘯をさるゑのさきと
明智山とてふとてふとてふとてふとてふと

前大僧正道隆

こもたふらねをふりしけり立御り人跡なき
きしらす 読人不知

人あやめられ清き酒をさすもいふと幸あは
れあしきよきになひけり人のいふなり
けり 蓮生法師

こもたふらねのまにわたりしけり立御り人跡なき
きしらす 読人不知

人あやめられ清き酒をさすもいふと幸あは
れあしきよきになひけり人のいふなり
けり 蓮生法師

静なるまのいかりねあふとふりあはれ
大御門院少歌

世なるまのいかりねあふとふりあはれ
大御門院少歌

しひさも雅ふとふりあはれ
大御門院少歌

こもたふらねのまにわたりしけり立御り人跡なき
きしらす 読人不知

一ノ子

一ノ子

松風のそよぐとて雲とて世のわかれとていふ人

津守國助

あはれききとていふ人風とていふ人のいふ人

ふみ人石 一本有る盛徳

ふみ人いふ人ゆふとていふ人果て果てのいふ人

前大細とていふ人

何れもいふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

何れもいふ人いふ人いふ人

天台座主道玄

何れもいふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

何れも

平泰時卿ト

何れもいふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

前大僧正実休

何れもいふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

一ノ子

何れもいふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

九條たふ良女

何れもいふ人いふ人いふ人いふ人いふ人いふ人

後二位基輔

世にいとひしとわ月あふととみきつねとのけ
弘安元年百三十九年

二小法親王賞助

契つゝ又や君人吉野の露分よりと下る
山家乃んや 願念上人

今にふと夢のうやとりねと又とふ小宿のあ
笑成を友都下

ふれよのやえこはるの陰と誰よとふいふ月と
百三十九年 一時あふんや

有原為佐朝臣

はむいともあふんやふいふに立たりてふいふに

むふか

心園法師

世にふと夢のうやとりねと又とふ小宿のあ

前大細云笑家

ふれよのやえこはるの陰と誰よとふいふ月と
式乳門院御連

里にふと夢のうやとりねと又とふ小宿のあ
法下寂信

ふれよのやえこはるの陰と誰よとふいふ月と
守覚は親王家五平そふり

三條入道たる臣

思ふにあり大雅の君よりよき人などあるを
親しくす 惟康親王の御方より

由はふといたしむる人より本れたる人より
よき人よりよき人より中細云定家侍よりす
けみ紙よりすけみ 右原基俊

をうとふる程もゆいなりをりて及の程あり
親しくは師 續拾遺より入て侍る人

つうけり 津守國助

そのうちゆとりの意にふりて果ぬる人

返 親しくは師

をうとふる程もゆいなりをりて及の程あり
弘安元年 百よりふりてふりてふりてふりて
入道前たる臣

わが原の記よりいふにふりてふりてふりてふりて
けりてふりてふりてふりてふりてふりてふりて
養一けり 前大細云ふ氏

わが浦は独りわりてふりてふりてふりてふりて
水より けりてふりてふりてふりてふりてふりて

わが浦にふりてふりてふりてふりてふりてふりて
わが浦にふりてふりてふりてふりてふりてふりて

都一らす

前大僧正良家

あらねのちやういふれねしよといふせそめい

丹波長を都下

けふをいふふりたあといふはたき
弘長といふ内裏百々寺定行

あ大僧正良教

いふて定は年入道行の雲のふたねとて
述懐のいふあ 孝承政村

あめ風といふれ道行の代にふたねをいふ

源有長都下

風といふ破浪といふ海をいふふたねとて

前大僧正慈法よりいふいふはつら

けり

あ右近大將杉綱

道長といふこの海といふあといふはつら

へり

前大僧正慈鎮

あめといふいふいふ海といふてあといふ

都一らす

入道二品親王性助

いふてあといふいふいふ海といふてあといふ

内大臣

いふてあといふの河の首よりいふてあといふ

友原嗣房卿

ふ丹とのかりもいさなりと川をうへりてつるやゆき
一ふれのみそこなりゆきにけんのりといふ
ふーげん

前内大臣実

のちとえぬ流乃矢乃つゝて渾みせりや
はるさめーふーむりありけり
てゆくらむるよ
民部卿 漬宣

糸杉とてつ建あさまの松あり浪と色えそ
 還懷方中にあふ細云教良

玉碎のみらわぬ代に信ふよりいひゆるす

除目乃あゝ尚侍有原瑣子下小侍
せけり
即上天皇

その心精妙なるを子に傳へて昔の成を之ん
以て

契いふの末にねたもののひともやうにらん
 不寧控帥よりありてゆゑに
 らいりやをさるゝふりてゆげ

前大納言經任
 三三き香推乃神也
 源為泰

題

今に此の如く我の如くして我の老の毒を洗
ぬる基頼

身はつるまきぬるまきぬるまきぬるまきぬる
前園白を改て信

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
笑後久世

我の如くして我の如くして我の如くして我の如くして
源師光

山をふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
惟宗忠宗

中へふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
中務卿宗子親王家の百々々々々

た近中将具氏

ふふふ我の如くして我の如くして我の如くして我の如くして
武乳門院卿

平久時

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
権僧正源

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

平生法師

まろふらんといふなりけり
世にまろふらんといふなりけり
前入納云々家

しとて身ふらんといふなりけり
世にまろふらんといふなりけり
天台座主道玄

平生法師
しとて身ふらんといふなりけり
世にまろふらんといふなりけり

平生法師
しとて身ふらんといふなりけり
世にまろふらんといふなりけり

円道法師

しとて身ふらんといふなりけり
世にまろふらんといふなりけり
前右米門膳基

しとて身ふらんといふなりけり
世にまろふらんといふなりけり
道徳法師

しとて身ふらんといふなりけり
世にまろふらんといふなりけり
法印定之志

しとて身ふらんといふなりけり
世にまろふらんといふなりけり
お糸水後能徳

しとて身ふらんといふなりけり
世にまろふらんといふなりけり
お糸水後能徳

平時廣

わくのこひあきくろ光る月ねえせしとね嘆もわ
前僧正実休

もろくも我のほの影未とまらせしと月と光
弘安元年百とまらし一町

あ右無未幾る教

乃くも程ありしとまら面影や光とまらしと後
ん

むしらす 鴨長明

いふせん後るそふらふとむ影も青ねあふた
前大納言忠良

わくもて世の光あひとまらゆねの影も涙あふ

平時元

ふらひの影もふとら月れい実とまら世と
ちられ

平親世とまらとらとまらせゆらとまらとつ

りけり 天台座主道玄

乃聖へは影をりれとまらとまらぬの世とまら

述懐乃と 後久我と改た后

んふとらとまらねえとまらとまらわとらとまらと

平宗宣

梓らんれとふとらとまらとまら今とすとまらとら

友原為佐朝臣

わらふとあはれとて母をさへも殺さるゝ人ぞ

弘安元年百三十九年より

入道前を改む

けしきといふも果てとも我れをわすれぬ

むし

人に忠成のたふ

あふといふ我れをわすれぬとていふもわすれぬ

中に祐也

あふといふ我れをわすれぬとていふもわすれぬ

平時村下

あふといふ我れをわすれぬとていふもわすれぬ

院大納言典侍

あふといふ我れをわすれぬとていふもわすれぬ

高階宗成朝下

あふといふ我れをわすれぬとていふもわすれぬ

永福の院がね

あふといふ我れをわすれぬとていふもわすれぬ

は眼能因

あふといふ我れをわすれぬとていふもわすれぬ

参紙雅雅

いふはるをり人ほふをりといふ世をわ

後二位行家

いふわるをり人ほふをりといふ世をわ

梅家使頭平

いふわるをり人ほふをりといふ世をわ

全刺威久

いふわるをり人ほふをりといふ世をわ

良心法師

いふわるをり人ほふをりといふ世をわ

静仁は親王

いふわるをり人ほふをりといふ世をわ

設留つ虎人捕

いふわるをり人ほふをりといふ世をわ

梅家使高定

いふわるをり人ほふをりといふ世をわ

平時常

いふわるをり人ほふをりといふ世をわ

道徳法師

いふわるをり人ほふをりといふ世をわ

心海上人

命をいふ人のたしむるはふききりて
は平定為

しるしをいふときあつて母をわたりては
守るは親王家の力なり。述懐

卒道は所

しるしをいふときあつて母をわたりては
世のつては百をうみゆる中に

前人儒正道性

海をいふときあつて母をわたりては
百をうみゆる中に

内人信

はたに代れ首なりあつて母をわたりては
あつて母をわたりては

いふときあつて母をわたりては
小倉山をいふときあつて母をわたりては

代れ首なりあつて母をわたりては
いふときあつて母をわたりては

そのられあつて母をわたりては
いふときあつて母をわたりては

人なりふ

いふときあつて母をわたりては
いふときあつて母をわたりては

都々々

は曉院御家

乃おとけふれとも心も意も小舟末とて

普光園入道前書

むくも母のりおれ氏のらもたけや

百々々めり一はは迷懷

天上天里

ゆておいおとてあき世中ふおる

誰だのまん

新垣撰和歌集巻十九

雜奇下

都々々

前関白を改大后

忘れとて誰ふいてあきふふ音とて

弘長元年百々々りける時松

あ久細云為家

音とてふふりねふれぬふふふ

むらけり池はゆりてふみゆけ

天台座主道玄

光て乃々我ものやうる人音とてれむらけ池

そのよゆいなりふきく我身はじしう
しん人不知

けふて我身はじし青きとくふて我身はじし
弘安元年百さうなりし時

前参議雅有

ゆきふらうふらういふらふいふらう
むししす 後人しす

教ふとみせは通ふ者なりゆきふらう
は眼を融

りしとねえなりふらうけえのたねをみ

源通有親信

きふり輝の光ふとくきふとく青きとく
故一条入道前実白なる

物ふてふらうけえの光ふとく青きとく
前右衛門督基成

徒ふてふらうけえの光ふとく青きとく
以持僧ふらうて二回ふらうて思

おてふらうけえ あ人僧正祐助

天下ふてふらうけえの光ふとく青きとく
懐旧なりふらう けえ人ふらう

なふといふはちて思ふ人ひはしるまはしる

高階基政卿下

いふまじきいふまじきの月日ふさくをいふ

出家とてある 惟宗威長

年月いふふまじきいふまじき月日ふさく

せとせむとて故人の事をいふていふ

ふに

三條入道内大臣

今更に神の色もあらふとて思ふとて思ふ

前大納言為氏卿下 仲の事

けりけり

権中納言云雄

月と持て我とて思ふとて思ふとて思ふ

ふに

前大納言為氏

何れとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ

平貞時卿下 仲の事

朝臣卿下 出家とてある

けり

前大納言為氏

世と持て思ふとて思ふとて思ふとて思ふ

ふに

平宣時卿下

年と持て思ふとて思ふとて思ふとて思ふ

けり

ふに

よゆきうつらうつら

道徳法師

今もとふらふと君とわかれぬと昔のよひをん
むしらす 典侍光子

あかり我身ふらふ君との煙とよきいふまに

意木田氏忠

をいふとふらふやなふゆふやふらふ女もあは
かお肉肉身まよりてはゆるる乃次は并
内侍人へふらふとふらふとふらふとふらふ

土御門入道内大臣

ゆきとふらふとふらふとふらふとふらふとふらふ
田村月守よりゆきとふらふとふらふとふらふ

性瑜上人

こいふとふらふとふらふとふらふとふらふとふらふ
はせのふらふとふらふとふらふとふらふ

新井内大臣

ゆきとふらふとふらふとふらふとふらふとふらふ
日けぬとふらふとふらふとふらふとふらふとふらふ
よけぬとふらふとふらふとふらふとふらふとふらふ
さきお細くとふらふとふらふとふらふとふらふ

金海

法下聖勝

いそそくわふも所ぬありたは之を救ふべき
前関白太政大臣にきこしめされし程に
しるしけり 前大納言為氏

とすそとをうあうや思ふ心をて知さうと
あ開白をひたす

延

あ開白き政大

与道色歌ふそとくはるきとてふ程は
 邦へす
 僧正慈順

卷之五

僧心慈順

大文院之れは強く故高野山にあり

年一十月

貞宣上人

君を又娶りあるてや高野山のおろろと原田
邦子 平江氏

鄭子

平江氏

此の如くは、
有原秀成

友原秀茂

行めたるぬふひの命をそとれかゝの世に
 糸遷は師とふるの老るゝかゝる
 よさゝるゝの老るゝかゝる

よきことを得るは

中務卿宗彥親王

さうりそとさうりふささあにまのいさふふ
素還法師

五

素還法師

くけきかもしとわじよあひまなりゆき
普光園入道お雲白くれゆそ坂よりゆき

天台座主道玄

多らぬ道に世は衰ふと思ふにいつて
是なり

報の害をわてはてすつおふ所ある所を
 後系極極改之れ得る所を今日迄二條
 とすひて得る所を前中納言定家

所をてけとて様頭一軒の者共を心せ

五

後二位家澄

[illegible]

後三位氏久

此と云ふは、
 平親世と云ふ
 光俊の父
 平親世

平親世

多深よりぬもけし山標新なるまゝの如し
 郁芳門院これよりして又今年此如し

の藤とて

人殺つてお

藤むとあふひは嘆きなりうらむに秋の露はふ

也ー

ふみ人不知

乃ちぬひは露けさまらる藤むなりあるとて秋
秋の比國の寺とて後一条入道前雲白れし
思あてふみゆき後光のまゝお授けなれ
くうらなむと悲ふとて我世の故おとる
九条内大臣ありて後の故さるる墓
まうりてふみゆき前大僧正慈法
心霊神のお業れとてこれ昔とてふ秋のふと

部ーらす

平時高

ふえぬもみろそつとあるとて人の昔れとてより白
系極院十二ひは一品種とて母屋の中
よつとすもて前開白を政大臣

初母ふとてつとてゆきえんふはけのさるふと
後醍醐院あるのち飛山殿とてま
始ひける

は室河新

大内親政の治もあふと昔ふとてまろ新
後一位撫子なりふとてゆけるはふとてゆき

後一条入道前雲白た

うらふもこれと形見とあつたて身ふく物波を

津守國平身ゆりてはふあ

津守國助

あふもこのやいそり面影のあらもあふあはる
檀中納言と宗身ゆりては三月あふ
の階入道たふ長許へけうけり

あふ僧正良光

うらふもふりかゝるあふも波ふくもあふ
有原ふたね下才ふの法縁に供養
ゆけりつゝふ寄葛蒲懷舊と

は下定為

あふもふりかゝるあふも波ふくもあふ
東二條院のす物ゆけりのやまふあふ
りけりつゝふ寄葛蒲懷舊と
あふもふりかゝるあふも波ふくもあふ

常盤井入る前太政大臣

返

東二條院す物ゆけ

あふもふりかゝるあふも波ふくもあふ
前大僧正澄年八月十五夜身ゆりて

よみゆけり

人龍の澄情

あまふみよの輝れ面影もさぬ月ふねの光
流る位を継ぎまうりては目較さそふと
ふいづけこい 安かつ陸人哉

今更ふふと我を所る所の故る月日なり
源時長おれ身ゆりて後才之のれま
いづきのりつらけり

源為孝おれ

初は後の二年れまの月面影もむいそふ
後流誠院くれもせ給る所素服給て後

中原の美おれ

ふすむのやうに程と深の袖もさうま
性助は親王身まうりにまはは眼の涙
うりつらけり 前大納言為氏

はるまに愛れおれまふさうゆあきうめ
返 法眼の涙

はふふとふふとふふとふふとふふとふふと
西行は師は世のふふとふふとふふと
お大納言成通

はるふふとふふとふふとふふとふふとふふと

る

西行法師

ねんぬるせの世中と着ていふは
都らす 有る京廻

はふそれのあはれとてふは世かよはれ
おの内約よりきつてはまうていふ
とたては美か下ふとてふは

井内約

美作のうたふは月がけつらふは
はれんとあふとてふは

蓮生法師

りふとふはふらふは
系極院うたふは

前ふは

りふとふはふらふは
うたふは

中務の宗親王

りふとふはふらふは
夏のは西行法師

待賢門院

りふとふはふらふは

五月の比ふ花の如家父の忌日とて約けり

よつらき 大納言師頼

是の如きくく昔と云ふねとけりあ
前大納言の如きゆりては目殺さる
程よあ大納言の氏より中つらけり

入道前大納言

五月の目殺さるいさく暗ね海や袖ぬすん
むーらす 如園法師

なそとく露の命といふとさゆさくの袖ぬ
は市宗雅

ころあも消のそりては誰とゆつたさあ

興信法師

ゆては月ひつるあそふ昔れ人あはあ
九條右大臣の如きゆりてはわがゆさ
きつるのりといふつらけり

源通氏朝臣

君あもあふりまはし命とてさそふあは
前大納言の如きゆりては懐舊のさ
よとゆけふ は眼を又
あつるあはれあはれみふさあ

我身いふすれつらき事なれども今いふふき
これいふ事なれども僧正道参り
着にみえゆきとらん

即ちいふすれつらき事なれども今いふふき

若れといふ事なれども僧正道参り
着にみえゆきとらん

新後撰和歌集卷第二十

笑奇

百々方々よませ給けり中に

後鳥羽院御歌

龜の尾乃岩ゆよあつ白玉敷きなりあき
弘長元年百々方々なりけり時に

常盤井入道おと政を

若れといふ事なれども僧正道参り
着にみえゆきとらん
建仁二年多羽殿より池上松風と云ふ
うめて梅をいふと云ふ

はるかにふたふた池あり小松ありてと松をさく
西園寺入道ありて政を治りて松のおひき
をとりてすて 大納言通事

中をさすてふと松陰のありて松をさすて松の
返 西園寺入道ありて政を治りて松のおひき

松のふたふた池あり小松ありてと松をさく
西園寺入道ありて政を治りて松のおひき

松のふたふた池あり小松ありてと松をさく
西園寺入道ありて政を治りて松のおひき

基後

まのちの十回にきく松の代はふと松をさく
子目ありてと松をさく

院御製

まのちの十回にきく松の代はふと松をさく
子目ありてと松をさく

右門院御製

まのちの十回にきく松の代はふと松をさく
子目ありてと松をさく

まのちの十回にきく松の代はふと松をさく
子目ありてと松をさく

子目ありてと松をさく 惟明親王

わがふもせのねをききけりねとけふふかふけし
建仁三年秋方前より秋阿よ九千餘あるを
けり阿房風の奇に 後集極極政あたる政
は秋津嶋人阿とえて君のひらけ月と力られ
白河殿と百そふより秋月

あふ納公雅言

あふ納公雅言の秋月八ふ代むつと秋をみけり
秋のふとふもせねきり

は里御家

ふもせねきりふもせねきり月日とふふ代むつと

建保三年八月中殿と池と月と秋とふと
と梅とけりふと 前中納公定家

あふ代と神とふとふとふとふと池とふと月と秋
西園寺入る前と政と臣

あふ代とふと月と秋とふとふとふと池とふと月と秋
弘安元年八月月と秋とふとふとふと

あふ代と臣

あふ代とふと月と秋とふとふとふと池とふと月と秋
前中納公雅言

あふ代とふと月と秋とふとふとふと池とふと月と秋

弘安三年九月十三日

次は月前祝 けしき御覧

とあるおの言ふおまじ月の事とて中をねたて

院御覧

来り世とくそいみめ院月の影とてうね秋のい

千五百番方合。 皇太后文女後成女

咲より君のみとて来いを皇太后の秋をねた

る前よりおまじつりける時

正二位家御

久しきおひく痛来乃来^{ちか}しとてこれねのうねた

むしらす

故一乗入る前開白たを

菊の露つりて園とてふ老とねたを君の

文治六年廿御入内屏風より

後京極持政おまを

君代は白く山の白菊といふい露れおまを

前中納言定家歳の高いよりめて

のあふりりもつりける

西園寺入道前を

わにいふとらとらと来れと来い来い

せ 前中納言定家

新ひがきと書しきものゝ二葉ののち世れあり
平時花う常盤の山花とて芳光祝とふ
とてとあり
有原宗徳

ふりてあ代白の山花とて芳光祝とふ
弘安元〇百とありとてとあり
時

入道おたぬた

ふとと来とありて一と井川君とて芳光祝とふ
芳光祝とふとてとあり
と

上上天宮

わあふの雲おふとて芳光祝とふとてとあり
芳光祝とふとてとあり
と

弘安元年百とありとてとあり
と

はる御殿

ふり川の入ふありとて芳光祝とふとてとあり
ふり川の入ふありとて芳光祝とふとてとあり
と

浪のふり川とて芳光祝とふとてとあり
はる御殿ふり川とて芳光祝とふとてとあり
と

遊義つて

はる御殿ふり川とて芳光祝とふとてとあり
弘安元年百とありとてとあり
と

時子約

照念院道前雲白上啟卷

幸ふら老來のこともいふ事なほさにかゝる子世やうけん
前開いたる旨

九そふふといりてきつたあふのさきも成の云
東二條院七千ふとせはる何よりせし

け

太上玄皇

百とあるを千と改むべしと云ふは世の言なり

院御製

いふそむきもやふ代の神と契り給の末とるけさ
臣一位貞子九十賀ふまよせける時よみ給

何

入道あき政大臣

代の終は初よりある老の故よりせん年をみるは
後鳥羽院御時やそふのまづりふらん
侍り
津守經國

津守經國

あめれきとのけろを難波の浦ふみれ連
あつたえのくさや態紀神来寺や戸山

前中納言家光

神代より初海より迄の山峯乃山此樹と云ふ
寛元四年悠紀風俗奇云神山

民部
經光

玉振うぬをと八分^{ウツ}をみ^{ウツ}のいそと^{ウツ}なるき
西安二年悠紀風俗神東より神の

前中納言意仲

柳より神のいよ^{ウツ}きそ^{ウツ}のい^{ウツ}つ^{ウツ}き

ふとや^{ウツ}らん

